

清朝をどう見るか

岸 本 美 緒

皆さんこんにちは、岸本です。過分なご紹介をいただきありがとうございます。

私をご紹介にありましたように、中國の明とか清の時代をやっておりまして、今日は「清朝をどう見るか」という題で、お話をさせていただきたいと思います。

秦の始皇帝以來、中國の歴代王朝はたくさんありますが、その中で清という王朝は、割合日本人に馴染みがある方か
なと思います。もちろん、渡邊先生がやっていらっしゃる三國時代ほどメジャーではありませんが、清朝といえ
たいこの時代かなというのは、皆さんおわかりだと思います。清朝ができましたのが一六三六年ですが、その時はまだ
今の中國の東北の端っこあたりにおりました。それが、中國本土に入ってきて全體を占領するのが一六四四年から四五
年ですので、中國史の中では一六四四年から清代と呼んでいます。それが倒れるのが二〇世紀のはじめ、一九一一年の
辛亥革命です。二六七年續いた王朝です。

日本で言いますと、江戸時代が一六〇三年に始まり、一八六七年に終わりますから、それを四〇年ほど後ろにずらし
ますと、清朝の時代になるわけです。

清朝は二六七年續きましたので、中國の歴代王朝の中ではかなり長い時間續いた王朝です。もちろん清朝よりも長く

續いた王朝もあるのですが、清朝は單に長く續いたというだけでなく、領土も非常に大きかった、と言う點でいいますと総合點で歴代王朝の中で一、二を争う大王朝であったと言ってもよろしいと思います。ただ清朝の場合、その支配者は、ご承知のように、現在の中國の人口の九〇パーセント以上を占めるいわゆる漢人ではなく、北方から來た異民族、滿洲人と呼ばれる人たちでした。中國の漢民族の意識からすると、北方の夷狄、野蠻人が中國に入ってきて占領した異民族王朝とも言えるわけです。こうした清朝に對する反感というものもありまして、清朝をどのように評價するか、今に至るまで様々な意見があるということが言えます。ですので、今日は清朝というものが今までどのように評價されてきて、そして最近の新しい見方ではどんなところが注目されているのか、そのようなことをお話してみたいと思います。

マーク・エリオットさんというアメリカの研究者が、日本には「清代史」研究と「清朝史」研究というものがあり、この二つは必ずしも同じではないんだということをおっしゃっています。この方は、今はハーバード大學で教えておられ、日本の學界状況にも詳しい方ですが、それでは同じく清のことを研究しながら、「清代史」と「清朝史」というのはどう違うのか。と言いますと、一般に「清代史」と言われるのは、中國史の一部としての清朝、つまり秦漢以來の中華諸王朝の最後の王朝という視點から清代の歴史を見る見方を指します。このような、中國史の一部分としての「清代史」の研究者たちは、主に漢文の史料を使って漢人社會の研究を行い、また「明清」などというように、明代との連續において清代をみる傾向が強いといえます。

一方で「清朝史」というのは何かというと、中國史のなかの一時代と言うよりはむしろ、北方から出てきてどんどん擴大して中國を占領した、この清朝という王朝の歴史そのものに關心を向ける研究姿勢を表しています。従って「清朝史」研究者は、もちろん漢文も讀めるのですが、滿洲語の史料を使いこなせるという點に、特色があるといえます。

私などはもっぱら「清代史」の立場、つまり中國史の方からやっているのですが、べつに「清代史」をやる人と「清

「朝史」をやる人とが特に仲が悪いとか、ろくに挨拶もしないとか、そんなことは全然なく、仲良くやっています。しかし、學會などで集まるときには、「清代史」の研究者は明代の研究者などと一緒に集まることが多く、また「清朝史」研究者は、モンゴル史研究者などと一緒に北方民族研究者の範囲で集まりがちだ、ということ、なんとなく分かれていくことは確かです。

このように、清朝を見るとときに、いわゆる中華帝國の歴史即ち中國史の立場から見ると、それとも北方民族の側から見るのか、ということでもかなり大きな違いがあります。そしてまた、清朝の支配者が北方民族だったということは、ずれにせよ事實なわけですが、これをどのように評價するのか。これについては例えば、清朝というのは満洲人が漢人を抑壓してひどい時代だったと言う人あり、あるいは、夷狄出身ではあるけれども、中國文化をよく學んで統治に成功したと言う人あり、あるいは、北方民族の優れた特質である素朴さとか實力主義とかがあればこそ、清朝の統治は成功したのだという人ありと、いろいろな見方が昔からありましたし、現在でもあるということが言えると思います。そのような様々な見方は、單に研究の進展によって變化するというよりは、大きな政治の動きによって影響されている面もあります。今日のお話では、前半で清朝の評價がどのように變わってきたかということ、後半の方では、では最近の新しい見方はどういうものかということ、これを簡単に話したいと思います。

そもそも、清朝が中國に入ってきた時から、清朝に對する見方には様々なものがありました。明は直接清に倒されたわけではなく、農民反亂で倒れたところで清が入ってくるのですが、その頃、漢人たちはどのように感じたかといいますが、やはり當初は、夷狄、野蠻人が入ってきたということで反感も非常に強かったのです。つまり、自分たちが中華の中心であるのに、辮髮などをくつつけた野蠻人が入ってきて全土を占領してしまった。そして、その清朝は漢人の男性にも辮髮を強制するのですが、こんな恥ずかしい格好はできないということ、抵抗する人もおりました。特に知識人、

學者などは中華文明に誇りを持っていきますので、辮髮にするなどということは耐えられない。ただし、辮髮にしないとどうなるかというところ、首を切られてしまう。當時の諺で「髪を留めんとすれば、頭を留めず。頭を留めんとすれば、髪を留めず」といわれていましたが、ではどうするのかということ、お坊さんになって頭を剃ってしまったら辮髮にしないで済むというので、お坊さんになる人もありました。

それでは庶民はどうかというと、庶民の中にも抵抗した人はおりましたが、やはり當時は数十年間も農民反亂や戦争などが續いて、みんな戦争にはうんざりしていたので、もうどんな勢力でもいいから、平和を恢復してくれるならばとありあえずそれでいいや、という人も多かったと思います。

一方、日本では清朝の中國占領をどう見ていたのか。日本人の考え方も、これまた人それぞれだったと思います。當時の日本人からみて、明というのは、戦争はあまり強くないと思われていたようですが、それでも文化的には凄い國である。それが清という夷狄、野蠻人に負けてしまったということで、日本の方ではそれを「華夷變態」と呼びました。中華が夷狄に変わってしまうということ。この事態に對して、いったいこれからどうなるのかということ、非常に警戒心を持って見ておりました。當時、中國で反清活動を行っていた勢力のなかには、日本に應援を頼んで清朝を倒そうという動きもあって、幕府の中でもそれに應ずるかどうかが議論がありました。清朝に對抗して勝てるかどうかかわからないので様子を見てみようなどと言っているうちに、清朝の統治が安定してしまったので、結局反清活動を支援することはありませんでした。

それでは日本の庶民はどう考えていたのか。庶民で明清交替の事情をそこまで深く知っている人はあまりいなかったでしょうが、たまたまこの明清交替を現場で觀察した日本の庶民がいました。というのは、ちょうど一六四四年、清朝が中國に入ってくる年ですが、越前の國、今の福井縣のあたりから商賣をしようとして海に出て、漂流して中國の東北部の

沿岸に流れ着いてしまった人々が、清朝の役人に捕まりました。ちょうどこの頃が東北から満洲人が北京に大移動してくる時期でしたので、それに連れられて北京にまで来ました。このときの體驗談が、後に『韃靼漂流記』という書にまとめられています。この韃靼というのは、モンゴルなど北方民族を指して使われた言葉ですが、ここでは満洲人のことです。これを見ますと、満洲人のことを非常に高く評價しているんですね。少し読んでみます。「御法度萬事の作法、ことの外、明に正しく見へ候」、正しく法律がゆきとどいているということですね。「上下共に慈悲深く、正直にて候。偽申事一切無御座候。金銀取ちらし置候ても盜取様子無之候」、金銀を置きちらしても誰も取る人はいない、「北京人の心は、韃靼人とは違ひ、盜人も御座候、偽も申候、慈悲も無之かと見へ候。去ながら、唯今は韃靼の王、北京へ御入座候に付、韃靼人も多く居申候、御法度萬事韃靼の如くに仰付候て人の心は能成候はんと韃靼人申候」、北京人というのは、漢人のことですね。漢人は満洲人に比べていつわりが多く、慈悲もない、と。これは、満洲人と一緒に行動しているうちに、満洲人の見方に染まってしまったのかもしれませんが、満洲人は正直で法律などもしっかり守るけれども、中國の漢人はずるくてよくない、などと考えていた人もいたわけですよ。

さて、清朝も中國に入ってから數十年は、清朝に對する反抗運動が續き、安定しなかつたのですが、一七世紀末から清朝による統治も安定してきました。そして、一九世紀の初期まではだいたい平和な時代ですね。その頃は、後に少しご紹介しますが、清朝の側もいろいろと氣を使って、清朝の統治がいかによさうかというキャンペーンをはったり、あるいは中國の傳統的な學問を擁護したりするものですから、漢人の知識人とも概して良い關係になっていきました。ただ、清朝に對して反抗するような動きに對しては、反清的な書物を禁書にしたり、それから清朝に對して少しでも否定的なことを書いた人は、見せしめに處刑したりして厳しい取り締まりをやりました。同時にこの時期は、平和が續いて好景氣になりました、經濟的には比較的豊かな時代だった。そのために、清朝に對して皆が全面的に好感を持ってい

たというわけではないとしても、その反感が表に出ない時期だったと思います。

一般庶民の對清感情も、一七世紀の末からはかなりよかったといえるのではないかと思います。後で少しご紹介しますが、清朝の皇帝が巡幸したりしますと、たくさんの人が見物に集まってきて、熱狂的に歓迎するという風潮がありました。興味深いことは、清朝盛期の皇帝である乾隆帝は實は滿洲人ではなく漢人なんだという話が、当時の一般庶民にかなり廣まっていたということです。どういう事かと言いますと、乾隆帝のお父さん、つまり雍正帝ですが、この人がまだ即位前のことですが、ある漢人の官僚の家に男の子が生まれたので、その赤ちゃんを雍正帝に見せに行ったのですね。たまたまその時、雍正帝には女の子が生まれていて、雍正帝は男の子が欲しくなってこっそり赤ちゃんを取り替えてしまった。漢人の官僚の方は、見てみたら女の子に代わっていたのでびっくり仰天したのですが、相手は皇子ですから何も言えず、しかたなくそのまま歸宅しました。そして、その男の子というのが、大きくなって乾隆帝になったので、乾隆帝の父親は本當は漢人なのだ、という説です。乾隆帝はたびたび南方に巡幸して、浙江省の海寧というところで陳氏という漢人官僚の家によく泊まっていたのですが、こういったことから乾隆帝は陳氏の父である陳氏に會いにいくのだ、というこのような傳説が出てくるわけです。

その頃の日本はどうであったかというところ、このころはご承知のようにいわゆる鎖國政策をとっておりまして、日本人が中國に行くことはできませんでした。しかし、中國に對する關心というものは意外に高かったのです。

例えば、將軍吉宗の時代などは、この將軍がけっこう學問好きでありまして、中國の本をたくさん輸入して、中國の法律や制度などを勉強してとりいれようと思いました。このときに、長崎に來航した中國の知識人から當時の清朝の状況、例えば皇帝の政治のやり方などを聞き取り調査したりしています。吉宗などは、當時の中國に對して非常に高い評價を保持していたと考えてよろしいと思います。

また、一般庶民のレベルでも、中國の風俗に對しては、關心が強かったようです。當時の長崎には清の商人たちがやって來ており、ここがいわば中國の情報の窓口だったわけです。一八世紀の末に作られた『清俗紀聞』という繪入りの清代中國の風俗圖鑑がありますが、その編者の中川忠英は、長崎奉行でありました。清から來た商人たちに中國の人々の生活ぶりについて質問して、一般庶民の衣食住から、生活用品、年中行事、禮儀交際、風呂屋とか床屋の様子等々、細かいことをたくさん聞きました。日本の繪師に繪を描かせて、出版した本です。これは、清代の庶民生活に關する非常に貴重な史料だといえます。そういったことを考えますと、當時日本は鎖國をしていたとは言っても、清代中國に對する好意的關心というものはかなり強かったと言えると思います。

同時に江戸時代には、これまでずっと世界の中心であると思っていた中國に對して、それほどでもないんじゃないかという、一種の相對化ないし批判的な視點が出てきたことにも注目すべきです。

例えば、國學というものは、日本が一番すばらしい國だという觀點から、中國を逆に批判的に見ようとします。當時の日本にも儒學を勉強する儒者がいて、中國の學問というものはとても進んでいるのだから一生懸命學ばなければならぬというのですが、國學者としてはそうは思わない。確かに中國は昔から學問は發達してきたけれども、ではなぜ中國人がこんな難しい儒教を勉強しなければならなかったのかというと、それはそもそも中國人は性格が悪いから、その性格をなおすためには學問しなければならず、それに對して日本人の方は性格が良いからそんなに學問しなくてよろしいのだということ、日本の方が優れているという考え方をとったりします。

あるいは、オランダの蘭學、洋學というものも長崎を通じて入ってきております。國學とは異なり、ヨーロッパの學問を取り入れようということですが、これも必ずしも中國の學問が第一ではない、ヨーロッパにはもっと進んだ學問があるんだという考え方を、しだいに日本のなかに根付かせてゆきました。いずれにせよ、それまでの常識となっていた

中國が世界の中心であるというような考え方というものが江戸時代には變化してきたということが言えると思います。

これは「清朝」というよりはむしろ、「中國」全體に對する評價の變化といえるでしょう。

それが一九世紀の末頃になりますと、清朝の力というものがだんだん衰えてまいります。中國では改革派、革命派の力が伸びて、特に革命派の場合は清朝に對して、これを倒して漢人の國家を創らなければならない、中國は漢人のものなのに滿洲人という遅れた民族が入って統治しているからこんな弱くて遅れた國になってしまったのだという、漢人ナショナリズムが勃興してきます。このなかで清朝に對して、清朝がいかに漢人をいじめてきたか、清朝皇帝がいかに贅澤をして漢人を苦しめたか、といった批判が出てきます。清朝が一七世紀に本土に入ってきた際に、抵抗する漢人たちに對しては虐殺事件をおこなっているんですね。清朝が統治する時代には、それは言っではいけないことになって封印されていたのですが、清末になるとその当時の資料などが出版されて清朝がいかにひどい王朝であったかが喧傳されるわけです。清朝については遅れた、無能な、そして專制的な王朝であるというイメージが強調されてくるというのが清末以降の状況で、それは辛亥革命が起こって民國になってからも續いていきました。二〇世紀の中國の歴史というのはいわば中國ナショナリズムの歴史ですから、そのナショナリズムの中心をなしてきた漢人の目から見ると、そのような見方が強調されてきたと考えるとよろしいかと思えます。高く評價する場合も、それは漢の文化を取り入れたからよかったですという、漢人から見ると評價するという傾向が強かったのですね。

日本ではどうであったのか。一九世紀半ば以降の日本では、歐米に習って近代化するという立場から、清朝は遅れているというイメージがずっと強くなっていたと考えて良いと思います。ただ、日本人の見方と言っても一枚岩ではなく、今日の「清代史」、「清朝史」の違いにつながってくるようないろいろな見方があるのですが、このあたりは話していると長くなりますので、省略いたします。

こうした見方が変わってきたのはいつ頃かと言いますと、わりあい最近、二〇世紀の末頃から、清朝をどう見るかという議論が活発化してきたということができると思います。そういった議論の活発化は世界中で起こっておりまして、中国とか日本ばかりではなく、最近国際的に話題になってるのがアメリカの清史學界に端を發する論争であります。

アメリカの中國史學界では、従來中國系の學者が強くて、こういった中國の學者は漢人の立場から中國を見るという傾向が強かったのです。それに對して近年では、マーク・エリオットさんのような人たちとか、あるいはイヴリン・サカキダ・ロウスキさんという日系の女性研究者がおられますが、こういった人たちがいわば漢人中心ではない立場から、もう一度清朝を見なそうという議論をやっています。このイヴリン・ロウスキさんが、いわば長老である何炳棣かへいていさんの議論を、ある學會の基調報告で批判しまして、それで何炳棣さんも負けずに反論したりして、そのあたりで議論になっています。

それではロウスキさんたちは、今までの研究のどこがいけなかったと言うと、やはり今までの清史研究というのは漢人の立場から見ている。滿洲語文獻を使わずに漢文の文獻ばかり使っていたこともあって、滿洲人の立場というのがわからなかった。これからはもっと公平な立場から、滿洲語文獻なども使ったりして清朝を見ていくべきである。そのように見ていくと、従來いわれていたような、清朝は漢化したから、即ち中國文化をよくとり入れたから成功したのだ、という考え方はやはり漢人中心の偏った考え方ではないか。むしろ滿洲的性格というものは、けっして遅れたものではなく、北方民族のやり方を保持してきたからこそ清朝の統治は成功したのだと考えるべきではないか、大體このような議論であります。こうした問題をめぐる論争は今でもまだ續いているといえるでしょう。

日本でもやはりこの十年あまり、従來の「清朝史」と「清代史」とがバラバラになっているような状態を乗り越えて、もっと総合的な見地から東アジアの状況を捉えようという議論が盛んになってきました。つまり、従來の議論では、滿

洲人の側から見るか漢人の側から見るか、というやや對立的な枠組みがあって、現在のアメリカの議論もそうした傾向なきにしもあらずと思うのですが、むしろそうした枠組みを乗り越えて、清朝というものが、滿洲人や漢人だけでなくいろいろな民族が入り交じっていた一六、一七世紀の状況のなかから生まれてきた、ということに注目してみよう。こういった廣い見地から見ると清朝というものを新しい視野から眺めることができるのではないかと、抽象的に言ってもなかなかわかりにくいと思いますので、今日の話の後半でお話ししたいと思います。

現在の中國でも、清朝に對する見方は非常に大きく變わってきております。一九八〇年代くらいまでは、清朝はいわば悪役と申しますか、異民族王朝で漢人を抑壓したとか、遅れた民族であったのでこれまで發展していた經濟が停滯したとか、そういうことを論ずる人が多かったようです。しかし、今では清代はなかなかすばらしい時代であったと、少なくとも一八世紀くらいまで中國は世界に冠たる國で、清朝の統治は成功していたと論ずる人たちが多くなっています。中國人民大學の戴逸という先生は、今の中國の清朝研究者のなかで大變有力な方で、清史關係の巨大プロジェクトのリーダーをしていらっしゃいますが、この方が二〇世紀の終わりにまとめた『一八世紀の中國と世界』というシリーズ本では、「一八世紀…は清朝の康熙・雍正・乾隆の盛世で、政治は清明で、社會は安定し、經濟は繁榮し、文化は隆盛で、多民族國家の統一は非常に強固であった。」というのが共通の見方になっています。どうして清朝が高く評價されるかというと、やはり一つは民族問題でしょう。現在の中華人民共和國は、國內にモンゴル人とかチベット人とかウイグル人とか多數の民族を抱えています。そういった人たちをどうやってうまくまとめていくかということが大きな問題になっております。その點から見ますと清朝は非常にうまくやったということ、どうして清朝はこんなうまくできたのだろうかということが關心の對象となっているわけです。またそのほかにも、經濟發展のもたらした自信というものがあると思います。近年の經濟成長の中で自信を持った中國の人々からすれば、中國の歴史というのはけっしてヨーロッパ

に比べて劣っているわけではない、一八世紀まで中國は凄かったではないか、ということですね。

そういった中で清代への高い評價が出てくるんだと思います。一般庶民の中でも清朝皇帝を主人公とする小説とか、テレビドラマの類とかが非常にはやっております、「康熙帝國」、「雍正王朝」などという、日本でいえばNHKの大河ドラマのようなものがたくさん作られています。私もDVDで全部見たのですが、なかなかおもしろいですね。皇帝を單純にヒーロー化するというよりは、むしろ皇帝が大きな帝國を統治していく上でいろいろ苦勞している様子、たとえば官僚の汚職とか、官僚どうしの黨派争いとか、妃たちが嫉妬しあうとか、そういったものに悩みながら皇帝が責任感を持って統治していく様子を描こうとしていて、やはりこういうものを観ていると、中國の人たちにとってはこういう人が理想のリーダーだと感じられるのではないかと思います。

さて、以下では、以上述べましたように清朝に對する見方が大きく変わる中で、私などが屬しております日本の學界においてどういった研究がなされているのかということを紹介したいと思います。

ではまず、清朝がそもそもどういふところから出てきたのかということからはじめたいと思います。中國の歴代王朝を、例えば唐代あたりから見えますと領土が小さい王朝と大きな王朝とがわりあい交替して出てくるんですね。宋というのが領土が小さい。その次の元というのがモンゴルの作った王朝ですから領土はとてつもなく大きい。それから明というのがまた小さい。それから清は大きい。繰り返し交替で出てくるわけです。しいて大きい中國と小さい中國とというふうに分類してみますと、明は小さい中國と言えらると思います。小さいというのは、單に領土が小さいだけでなく、民族構成からしても、例えばモンゴルの元や滿洲人の清は、領土の中に漢人だけでなくいろいろな民族を含んでいるわけです。それに對して宋とか明というのは、いわば漢人中心の王朝と言えらると思います。ただ、明は最初の方は永樂帝という積極的な皇帝がいます、モンゴルに遠征したりして大きな中國を創ろうとしたのですが、彼の死後、一五世紀

の半ば頃からは逆にモンゴルに壓迫されまして、それ以後は皆さんが北京に旅行されたときにごらんになる萬里の長城、あれは明代に造られたものですが、それを修復しましてもっぱら外敵を防ぐといういわば専守防衛的な立場をとりました。それで明はもっぱら漢人の王朝ということになるわけです。

そういうことで、明の特徴というのが一つは漢人の王朝ということですが、もう一つの特徴というのが、他にもいろいろあるのですが、議論に關係あるところだけ申しますと、明朝國家というのは對外的に自由に行き來できなくて、民間人が外國と自由に交易するということは厳しく禁止されていました。では交易は何も行わなかったのかというと、そうではなく、いわゆる朝貢ですね、即ち、周邊諸國が中國に對して貢ぎ物を持って行く、それに對して中國の皇帝がお返しをするという朝貢貿易とか、あるいは朝貢の使者が來た際に商人がくっついてくるとか、そういう政府間の關係に關わるような交易は許されていたのですが、一般の人たちが交易するということは許されていませんでした。そういう意味では制限の多い體制であったと考えるてよろしいと思います。こういう海外交易禁止のことを海禁と言います。

こうした明朝の體制が大きく動搖してくるのが一六世紀のあたりです。ではどうして動搖したのかと言いますと、それにはいろいろな理由があるのですが、一つの理由として世界的な交易の活發化ということが言えます。ヨーロッパ人がアメリカ大陸に入ってそこで銀山を開發したというのは有名ですが、日本でも當時はそのアメリカに次ぐ銀の産出量がありまして、當時の交易ブームに乗って、アメリカ銀は世界中に、日本銀はもっぱら中國にながれていくわけです。當時中國は生絲・絹織物や陶磁器など、世界的に需要の多い産業がありますので、商人がそういったものを買いたくて銀をもって中國に押し寄せて來ます。しかし、先ほど言いましたように自由な海外貿易はできないということと密貿易が盛んになされるようになります。それを官憲が取り締まる。そうすると黙って捕まるのは嫌なので、皆武装船團を組んで抵抗したりします。こうして、交易ブームと共に中國の周りではいろいろな勢力による戦いが起こってくるわけで

す。こうした周邊部の騷亂状態、即ち、交易をやりたい人たちが中國に侵入してきて荒らし回ったり、官憲に反抗したりするような状態が中國の南と北で同時に起こってきましたが、それをまとめて北虜南倭と言います。北虜というのは、北方のモンゴル人が中國に侵入してくることを指します。それから南倭というのは、東南の沿岸、浙江省とか福建省とかのあたりを、倭、即ち日本人のことで倭寇といわれますが、これが荒らし回るということを指します。それが一六世紀の中頃です。

北虜南倭といわれるこれらの人々は、必ずしもモンゴル人だけ、日本人だけというわけではなく、中國人で密貿易をやりたい人たちも、多數積極的に参加し、手を組んで密貿易をしたり、戦ったりするわけです。

そういつたことで明の統制というのがだんだんと弛んできました、朝貢體制も崩壊して行き、これまで朝貢貿易で一本化しようとしていたのが、民間で勝手にやっている交易の方が盛んになってくる、それで明もしかたがないのでそれまでとってきた海禁政策を弛めざるを得なくなってきました。ということで一六世紀半ば以降の中國の周邊地帯では、武力を備えて貿易を行う様々な勢力が発展してきて戦いあうような状態が全般的に生じてきたのです。

これを大きく分けますと北方の貿易圏と南方の貿易圏とに分けられると思います。北方の交易圏と言いますが、だいたい中國の東北地方、よく滿洲と言われる地域ですが、それから日本海周邊にかけてのあたりです。こちらへんはだいたい漢人や滿洲人、當時はまだ滿洲人のことを女真人と言っていたのですが、その女真人とか、それからモンゴル人とか、朝鮮人とかいろいろな人たちが入り亂れて交易をやっていました。

ではどんなものを交易していたのかというと、このあたりの有力商品というのが朝鮮人参で、これは當時の中國における最も代表的な薬でしたが、朝鮮と中國東北の境のあたりの山地でしか採れないので非常に貴重な重要商品でした。あとは北方で獲れる毛皮などの交易も行われました。またそれほど量は多くないですが、北海道を通過して日本とも交易

が行われていたので、北方の交易圏には日本の北部も入っているといえます。

南方の交易圏は、これは北方よりもっと大きいのですが、東シナ海地域から南シナ海地域、ようするに中國の東南から日本、フィリピンなどを大きくカバーするような交易圏ですね。ここでは中國人や日本人、それからヨーロッパからやってきたポルトガル人とかオランダ人とか、そういう人たちが交易の利益を巡って争っていました。このあたりでは何がやりとりされていたのかと言いますと、やはり先ほど申し上げた銀とか絹とか生絲とか、そういうものが交易されていたわけです。

この北方交易圏から清朝は出てくるわけですが、では清朝はどのようにして出てきたのか。と申しますと、一六世紀までは彼らは滿洲人ではなく女真人と呼ばれていましたが、遼東という今の中國東北地域の狩獵採集民族、つまり農耕もやってはいたのですが、農耕よりも狩獵や採集に大きく依存していた人たちと言ってよろしいかと思えます。狩獵採集民族というと、なんだかいかにも縄文時代のようにドングリを拾ったりお魚を獲ったりして暮らしているような感じがしますが、女真人はそればかりではなく、朝鮮人參、これは畑では栽培できず、山地でしか採れなかったので、これを採集する。それから狩獵をして毛皮を獲ったりする。こういったものは自分たちで使うのではなく、むしろ國際交易の主要商品であったので、そういうことでかなりもうけてきたわけです。ですので、この女真人は狩獵採集民族と言っても素朴な原始的な人たちではなくて、相當に商人的な性格をもっていたといわれます。

明代では、女真人はどうなっていたのかというと、いちおう明の領土に入っているのですが、完全に明の支配下にあったわけではなく、女真人の部族長が明から武官の地位を與えられ、また朝貢貿易を行う權利書のようなものを明からもらって、貿易を行うという形になっていました。一六世紀の半ばからどんどん交易が發達してきますと、明との朝貢交易が非常に儲かるということで、女真人の部族間での争いが激しくなってきました。勝ち残った人はたくさん權利書

を獨占して、交易で大儲けし、軍事的にも大きな勢力になっていきます。

そういう中から清朝が出てきます。清朝の始祖というのがヌルハチという人なのですが、女眞の三つの大きな部族のうちの一つである建州女眞を統一しました。年表を見てみますと興味深いのは、ヌルハチが女眞を統一して國を創っていく時期と、日本が戰國時代から統一政權をつくりあげていく時期とが、ちょうど同じ頃であり、同じようなプロセスをたどっていることです。日本では一五九〇年ころに秀吉の全國統一がありました、その後秀吉は餘勢をかって朝鮮に出兵してあわよくば明も占領してしまおうとするわけですが、結局失敗して撤退することになります。一方ヌルハチの方は一五八八年に建州を統一した後、他のグループに対しても統一を進め、このころには女眞人ではなく滿洲人と呼ぶようになるのですが、一六一六年に金（後金）という國を建國し、續いて明との戰爭を始めます。それから、ヌルハチの子供のホンタイジという人が一六三六年に清を建國して、明を壓迫するとともに、朝鮮半島に侵入して朝鮮を服屬させます。結局一六三六年に清が建國されてから八年後、一六四四年には中國本土が清に占領されてしまうということになります。つまり秀吉は日本を統一してから明を統一しようとしたけれどもだめだった。ヌルハチも同じ頃に建州を統一したのですが、秀吉が失敗した朝鮮・中國本土への進出という事業に、それから數十年たってヌルハチの後繼者が成功したわけです。

ヌルハチの肖像畫を見ていただきますと、容貌魁偉というか、いい面構えというか、いかにも建國の祖という感じがしますが、ヌルハチの事績については、『滿洲實錄』という本に記されています。この本は、ヌルハチの先祖に関する傳承から始まって、ヌルハチの一生を描いているもので、繪がたくさん入っておもしろい本です。この本が作られたのは一八世紀に入ってからですから、ヌルハチの生きていた時代とかなり隔たってはいるのですが、でも一七世紀に書かれた繪をもとにしていますので、當時の様子をわりあい寫實的に表していると言われています。ではそもそもヌルハチ

は、どういう家柄の人なのかと言いますと、清朝の公式見解では、ご先祖は代々明の武官をやっていたということになっています。しかし、実際はそうではなく、ヌルハチの先祖がどういった人なのかはわかりません。ヌルハチのお祖父さんあたりが、ちょっととしたグループのリーダーで、中國東北部の市場に出入りしていたということはわかっています。それ以前のこととはあまりわかりません。いずれにせよ、ヌルハチの家はあまりたいした家ではなく、ヌルハチが初めて擧兵したときも手勢數十人の小さなグループでした。しかし、勇猛果敢なリーダーでしたので、部下の信頼を得て、常に先頭で戦って他のグループを併せていったわけです。『滿洲實錄』には、ヌルハチが初めて手勢を率いて擧兵した場面の繪がありますが、その脇に三つの言語で説明が書かれています。上から滿洲語、漢語、モンゴル語ですね。さまざまな民族の協力によって支えられている清朝では、複数の言語がいわば公用語として使われていました。滿洲人というのはもともと字が無くて、ヌルハチの時代にモンゴルの字を少し變えて滿洲文字を創りました。です。で、モンゴル字と滿洲文字はかなり似ております。

『滿洲實錄』のヌルハチの即位の場面では、臣下が上奏文を捧げているところが描かれています。なぜ上奏文を捧げているのかというと、當時、即位するときには自分が皇帝になりたいといった態度を示してはいけないので、臣下の方からどうか即位してくださいというお願いを上奏する形をとることになっているからですね。ここでなぜ女真人が滿洲人と呼ばれるようになったのか少し説明しておきますと、それは繪のなかでヌルハチが手にもっている數珠と若干關係があります。今日本人のなかには、中國の東北部の地名が滿洲であって、そこから出てきた人たちだから滿洲人だ、となんとなく思っている人が多いかもしれません。しかし、これは逆でして、滿洲というのは元々民族の名前です。女真人が自分で滿洲人と名乗り、それで滿洲人の出身地だから、この地が滿洲、マンチュリアと言われるようになったわけです。それでは、その滿洲というのはどういう意味かというと、滿洲語でマンジュというのは、文殊菩薩の文殊のこ

とです。彼らは佛教を信じていまして、その中でも文殊菩薩、マンジュを信じていました。自分たちはマンジュの人たちであるということで、マンジュと呼ぶようになったのです。文殊菩薩というのは、ご承知かもしれませんが、三人寄れば文殊の知恵なんて言う言葉があるように、頭の良いものといわれていますね。満洲人の特徴として、やはり聰明さを尊んだ人たちであるということがいえると思います。

さて、ヌルハチは一六二六年に死んでしまうのですが、その後を継いだのがホンタイジと言って、このホンタイジの時代に新しい國號を名乗ります。ヌルハチのときは金でしたが、それに對してホンタイジが建てたのが清なんですね。ではなぜ、二十年くらいしか経っていないのに新しい國を建てたのかといえますと、本当のところはホンタイジに聞いてみないとわかりませんが、金と清とはかなり國の性格が違うということが言えると思います。というのは、ホンタイジの時代に創った清では、ホンタイジが皇帝の位につくときに、ホンタイジに皇帝に即位してくださいとお願いしたのが、満洲人ばかりではなく、モンゴル人や漢人など三つのグループでありました。つまり、満洲人は満洲語で、漢人は漢語で、モンゴル人はモンゴル語でそれぞれ書いた上奏文を出したのであって、ホンタイジの建てた清朝というのは、單に満洲人だけの國ではなくて、モンゴル人や漢人が一緒に入っている、いろいろな民族で一緒に創る國だということに考えられてきたと言うことができます。というのは、ホンタイジの時代には、戦争で領土を広げているわけですが、その中でモンゴル人や漢人の部隊をどんどん吸収して、それを自分の直屬の軍隊にします。ホンタイジというのはヌルハチの子供の中では八番目の子なので、お兄さんをはじめ自分よりも目上の方がたくさんいるなかで、皇帝になったわけです。それでどのようにして自分の力を強めていくかというところ、モンゴル人とか漢人などの外人部隊、即ちモンゴルの騎馬戦隊とか、最新式の大砲を持っている漢人の軍隊を自分の直屬の配下として軍事力を強化していったというわけです。こうなりますと、すでにホンタイジにとって、モンゴル人も漢人も非常に重要である。清朝というのは、

滿洲人の皇帝をリーダーに、そうしたいろいろな民族が集まって創る國というように考えられていたと言えると思います。

以上、どのようにして清朝が出てきたのか簡単にお話したのですが、まとめとして強調しておきたいのは、清朝の性格を、北方の遅れた民族が闇雲に中國に侵入して占領した王朝というふうに見えるべきではない。むしろ、一六世紀後半から一七世紀前半にかけて中國の周邊で國際貿易が活發化する中で、日本の統一勢力をはじめ、いろいろな新しい勢力が出てきて次々と國をつくり始めた、そのひとつであったという點を強調したいと思います。

例えば當時、東南の沿岸では倭寇の親玉であった中國人の王直という人が一六世紀の半ば頃には王を稱して、日本の五島列島に本據を置いて一種の王國のようなものを創っていたり、同じ頃に日本では統一の動きが始まって戦争の中で新しい統一的政治體制が創られてきたり、それから東北地方では滿洲人の清朝が創られてくるし、もう少し視點を南に下げてみますと、東南アジアでもタイのアユタヤ朝とか、ビルマのトゥングー朝とか、スマトラのアチェ王國とか、どんどん強い國が出てくるんですね。なぜ強くなるのかというと、やはり交易の波に乗ってお金を儲けて、しかもお金を儲けるだけでなく、交易を通じて新しい武器を導入する。織田信長が鐵砲隊を作ったのはその典型です。このように、鐵砲や大砲など新式の武器を手に入れて周りの勢力を従えて、中央集權的な勢力をつくっていくというような動きが、あちこちで出てくるわけです。こうした國際競争の中で、中國の周りではたくさんさんの新しい勢力が成長してきます。

清朝というのもまさにそういう勢力の一つで、だからけっして遅れた北方民族ではなくて、當時の交易の波に乗ったいわば新興勢力の一つであったと言えると思います。このような新興勢力が周りにたくさん出てくるおかげで、明はそれらを討伐しようとしても財政難になるばかりで、だんだんコントロールできなくなって、衰退していくわけです。

次に清朝がどのように擴大して、統治していったかということを話したいのですが、時間がなくなってきましたので、

ごく簡単にいたしましょう。

中國本土に入ってきてから、清朝は一八世紀の半ばまで、どんどん領土を拡大していきませんが、その最大となった領土と今の中國の領土とは、現在外モンゴルがモンゴル國となっているなどを除きますと、ほぼ重なります。今の中國の領土の枠組みというのは、だいたい清朝のときにつくられたと言えます。清朝というのは東北の端っこの方から始まった國ですが、どんどん領土を拡大して一八世紀の半ば頃にはこういう廣大な領土をもち、その中にいろいろな民族を抱え込む多民族國家を創りあげたわけです。

その多民族國家の皇帝を例にとって、清朝の性格を見てみましょう。康熙帝というのは第四代の皇帝、ヌルハチの曾孫なんです、中國歴代王朝の皇帝の中でも名君といわれる人物です。この人はもちろん滿洲人ですが、この人のお祖母さんというのがモンゴル人の女傑で、お母さんは漢人ですから、滿洲人とはいっても體の中にはモンゴル人や漢人の血が流れているし、言葉はモンゴル語も滿洲語も漢語も話せる、という多言語の使い手でありました。つまり滿洲人といっても純粹な滿洲人というふうには考えるべきではないでしょう。

康熙帝の肖像畫はたくさんありまして、教科書などによく出てくるのは老年の肖像が多いですが、若いときのぽっちゃりした姿もあります。たとえば大きな筆をもって書をたしなんでいるところの繪、これなどは單に見せかけだけではありません。康熙帝は儒學の學問もできて、非常に一生懸命勉強しまして、儒教の經典にも注をつけたりして、學者としても漢人にひけをとらない人でした。一方で康熙帝は弓が強くて、特に騎射が得意だったとか、右手でも左手でも矢を射ることができた、などと言われています。お世辭も若干あるかもしれないけれども、やはり文武兩道の人であったといつて良いかと思えます。

さらに、康熙帝といえどヨーロッパの學問との関係も述べておかなければなりません。ヨーロッパ人が描いた康熙帝

の繪もいくつかありますが、單に康熙帝は漢人の學問に通じ、北方民族風の武藝も達者であったというだけでなく、ヨーロッパのキリスト教宣教師がもたらした學問にも非常に興味を持ちました。現在故宮には宣教師から康熙帝が數學などを習った際の計算尺とか計算用紙、實驗器具などが残っておりますが、そういった理科系方面にも強い人だったようです。康熙帝の關心は、世界に開かれていたということが感じられると思います。

康熙帝の本據地といえ、一年の大半を過ごした北京といえるでしょうが、彼はあちこちに巡幸を行いました。大きくいって旅行先は三つあります。一つは東北、つまり故郷に歸って先祖のお墓参りをする。もう一つは毎年夏の終わりにから秋の頃までは、内モンゴルの狩獵場に行つて狩獵をします。あと、遠いのですが、江南つまり長江下流域の豊かな漢人文化の中心地にたびたび旅行しています。康熙帝の巡幸というのは、日本の明治時代の天皇のように津々浦々いろいろなところを回るのではなく、同じところを何回も何回も繰り返して訪れるんですね。これはなぜかと言いますと、清という國がいくつかの世界の重なり合いとして存在していたから、といえると思います。まず東北というのは滿洲人の地ですし、北方の内モンゴルというのがモンゴルの世界との境目である。内モンゴルの狩獵場に皇帝が來ますと、モンゴル人の人たちと一緒に武藝の稽古をしたりするわけで、モンゴル人との交流の場なわけです。さらにこの江南という地域が、まさに華やかな漢人の文化が榮える漢人世界の中心地なんですよね。このようなくつかの世界があつて、清朝皇帝がそれらを繰り返して訪れることによって、それらの世界の結びつきをはかるというのが、清朝皇帝の巡幸の仕事方といつても良いと思います。

北方の狩獵場を描いた「木蘭圖」という繪卷があります。これは康熙帝ではなく乾隆帝の時代ですが、カステイリオーネというイタリアの宣教師で有名な畫家がいまして、その人が中心になつて描いたものです。狩獵場で騎馬競技をやつてるところとか、テントを張つて露營していたりとか、やはりこれは北方民族の世界ですね。

一方で、江南への巡幸についても、「康熙南巡圖」という美しい繪卷が作られています。北京から南に向かう道筋に沿って、税を免除された民衆が集まって皇帝を歓迎しているところとか、黄河の治水工事を行わせているところとか、中国の古代に治水を行った聖王として有名な禹の廟に参詣したところ、南京の演習場で皇帝が軍隊の演習を見ているところなど、康熙帝が中国の傳統文化にも配慮しながら、清朝の善政をアピールしているところがよく出ております。

最後に簡単にまとめておきますと今日のお話で申し上げたかったのは、次のようなことです。清というのは東北にあつた満洲人の國家が中國に入ってきて満洲人が支配した異民族王朝である、これはむろん確かなことですが、そればかりでなく、むしろ清朝の理念というのは、多くの民族が一緒になって満洲皇帝を支えると言う理念で成り立っていた、その點に興味深い點があると思います。實際にどうであつたかと言うことはともかくとして少なくとも理想としてはそうでした。康熙帝は、漢人官僚といかに良い關係を結ぶか、いかにして漢人に皇帝として認めてもらうかということで非常に心を砕いていた。モンゴルに對してもいかに皇帝がすぐれているかということをアピールした。このように、いろいろな方面に對して氣を配って大帝國を統治しようとしたと言えると思います。こうして多民族國家の枠組みというものができるまで、それが現在に引き繼がれているのですが、しかし現在の中國における多民族統合というものにはさまざまな困難、問題がある。それは一九世紀以降の歴史の流れの中で、やはり一つの國というのは一つの民族がつくるものだという民族國家、ネーション・ステートという考え方がヨーロッパから傳わってきて、それが多民族國家の現状となかなかぴたり重なり合わないということがあるでしょう。一つの民族が一つの國家を創るという觀點から見ると、清朝というのは異民族が入ってきて漢人を支配した征服王朝であるという否定的なイメージでとらえられがちなんですが、當時としては普通な、自然なことであつて、一六世紀の後半くらいに出現してきた新興國家というのは、だいたい様々な出自の人々が一緒になつて國家を創るという意識があつたんですね。清朝というのは、その性格を一八世紀ころ

まで發展させ、かつ清末にいたるまで保っていました。

では今清朝が改めて注目されているのはどうしてかという点、一つの民族が一つの國家を創るといふ近代の原則が現在、少し崩れかけているところがあると思います。例えばヨーロッパのEUなどにしても、ドイツはドイツ、フランスはフランスというように完全に分かれて獨立獨歩というよりは、むしろ一緒になって融合できるところは融合していかうというふうな動きも出てきています。そういう點から、では多民族國家というものは一體なんなのかということ、改めて清朝が注目されていると考えるとよろしいのではないかと思えます。以上、早口になってしまいましたが、ご静聽ありがとうございました。

平成一九年一〇月二〇日 漢學會秋季大會講演録